

ソーシャル・キャピタルは階層意識にどう影響しているか

——生活満足感にたいする一般的信頼の効果——

成蹊大学

大崎裕子

1 目的

この報告の目的は、一般的信頼が生活満足感に影響しているかを検証することである。生活満足感とは、階層帰属意識との関連性がしばしば論じられ、広義の階層意識をなす一部とされる（吉川 2007）。しかし、生活満足感そのものの構造については、これまで十分に明らかにされていない。一方、ソーシャル・キャピタルの一要素である一般的信頼は、社会的安心の基盤としての機能を持つと考えられており、生活満足感に影響することが予想される。本報告ではこれを計量的に検証する。

2 方法

データには、東京都 49 区市に住む 25 歳から 54 歳までの男女を対象とした「結婚と子育て支援にかんする東京都民調査」（2011 年、金井雅之代表、郵送調査、有効回収数 1,230、有効回収率 51.0%）を使用した。被説明変数に「生活全般にたいする満足感」（回答分布：不満 5.5%、やや不満 21.0%、やや満足 54.0%、満足 19.6%）、説明変数には、一般的信頼（4 件法 3 項目の合計得点：3-12 点）のほか、それ以外に生活満足に影響をあたえると思われる主観要因として、仕事・収入の安心感、主観的健康感、近隣にたいする安心感、ソーシャル・サポートの 4 変数をもちいた。なお、性、年齢、学歴、収入、家庭状況（未既婚、子ども有無）の基本属性を統制変数として投入した。

3 結果

まず、一般的信頼と生活満足感の関連を概観すると、一般的信頼の 5 区間（3-4 点、5-6 点、7-8 点、9-10 点、11-12 点）ごとの、生活に満足している人（「満足」と「やや満足」の合計）の割合はそれぞれ、60.5%、61.0%、73.6%、79.5%、84.6% で、一般的信頼の高い区間ほど、生活に満足している人の割合が多かった。

次に、生活満足感を被説明変数とする重回帰分析をおこなった（図表 1）。一般的信頼以外の主観要因のうち、仕事・収入の安心感、主観的健康感、近隣にたいする安心感の効果が有意で相対的に強かった。また、基本属性では結婚、子ども有、収入の効果が有意であった。一般的信頼の効果はこれらよりは弱かったものの、これらの主観要因、属性要因を統制したうえで有意に生活満足感を説明した。

図表 1. 重回帰分析の結果

被説明変数：生活全般にたいする満足感	
	標準化係数
年齢	-0.006
男性ダミー	-0.007
大学以上ダミー	-0.006
結婚ダミー	0.139 ***
子ども有ダミー	-0.134 ***
世帯収入	0.135 ***
仕事・収入の安心感	0.286 ***
主観的健康感	0.183 ***
近隣にたいする安心感	0.168 ***
ソーシャル・サポート	0.047 †
一般的信頼	0.117 ***
調整済み決定係数	0.315

N=1,116, \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ .

4 結論

以上から、一般的信頼は、経済・身体・住環境等の基本的な生活の要素とは別に、生活満足に独自の寄与を持つと考えられる。他者一般を信じていることは、自身が社会とつながることができるという肯定的な見方を媒介して、満足感を高めることにつながる、というプロセスが想定される。

文献

吉川徹編, 2007, 『階層化する社会意識』勁草書房。